



## 金色だけで金色の世界をつくりたい

金色の紙、金色のインキ、そして掛け合わせで表現された金色。それぞれ異なるアプローチによる金色の表現に迫ることで金色の世界を浮かび上がらせたかったという谷口氏に、今回のトライアルについて話を伺った。

谷口広樹



—制作コンセプトをお聞かせください

ずっと以前から「金色を使う」というこだわりが自分のなかにはありました。いつか金色の紙や金色のインキを使って、金色だけの作品をつくって展示会をやりたい、そんな思いをずっと抱いていました。それで今回のお話があったときに、このチャンスを生かして以前から構想してきた金色の実験に挑戦したいと考えました。

—ビジュアル的にはどんなコンセプトだったのですか

最初は屏風絵のように、四季や宇宙観を盛り込んだ5枚でひとつの風景になるような世界観を構想していました。でも、やっていくうちにいろんなことを試したくなり、独立した作品づくりに変わっていきました。そこに日本的なオリエンタリズムのようなものが絡まってきて、金色の作品が5枚並ぶことで全体の統一感が自然に生まれてくるだろうと考えるようになりました。自分のこれまでの作品をリミックスして、金色の世界をつくらうという考えです。それに普段の仕事のなかで金色のインキを使うのは高いし大変でしょう？ 減多に使えないので、この際思い切り使ってみよう。

—金と言っても特色の金色や掛け合わせの金色、それに箔もあります

そうですね。時々、金色を使ったイラストレーションを提出すると、わざわざ特色の金色のインキで刷ってくれる場合がありますが、これが意外と絵と馴染まないことが多いです。善意でやっていただいていることはわかりますが、申しわけないけれど金色のインキを使わないほうがよかったな、と思ってしまうことがあります。何か空気感が違うんですね。原画に金色を使っているからといって、金色のインキで刷ればいいというものではないと思います。それを使うのなら、初めから計算しなければいけません。今回は箔は使えませんが、オフセット印刷なら金色の表現に迫ればと思っています。

—オフセット印刷ならではの金色の表現ですか

もともと金色というのは色彩学的には色ではありません。現象です。光の乱反射があって金色に見える。だからむしろ4色の掛け合わせで表現した金色のほうが金色らしいのかもしれない。もちろん、金色のインキが使われていれば、現実としては金色になるのですが、要は金色をどう捉えるかということが問題だと思います。たとえば箔押しされた金は、写真で再現するのはとても難しいでしょう？ 逆に実際には金色でないものも金色らしく撮影さえすれば金色に見えることもある。そこが面白いところでもあります。ということで、今回はわざと金色を使った絵を入れ込んで、4色掛け合わせで表現した金と、

金色のインキを使った部分を組み合わせた作品にしてみました。

**琳派に代表される日本の伝統的な装飾美術の世界をこよなく愛する谷口氏。  
その世界観の背景には、日本文化のルーツへ向かう視線があった。**

——金色へのこだわりは昔からあったのですか

ありましたね。絵でも使うし、装丁でもなんとか金箔を使おうと画策することもあります。日本に生まれたせいなのか、マルコ・ポーロのごとく黄金に対する憧れがDNAに刻み込まれているのか、この欲求がどこから来ているものなのか皆目わかりませんが、心騒ぐものがあります。

——先日見せていただいた学生時代の作品にも金色を使っていましたね

学生の時に日本美術に目覚めました。出身はデザイン科ですが、予備校時代にファインアートへの憧れを強く抱いたこともあって、普通にグラフィックの勉強をしてもつまらないと思っていましたから。それで昔の図案科のような考え方があった東京芸大の形成デザインコースに進んで、染色や版画、陶芸の絵付け、本格的な日本画の素材による仏教美術の模写などを経験しました。先生方もいわゆるグラフィックデザイン分野でない方が多くいて、研究室も国内外を問わずに装飾美術関係の本が並んでいるような場所でした。だから自然と文様や装飾を学ぶことになり、作品に金色を使うことを考えるようになったのかもしれない。結果的にはそれが面白かったし、僕にとっても良かったと思っています。

——谷口さんの作品には、どこか和的なものを感じます

よく日本画科の出身だと間違われます。でも僕自身は特に「和」をねらっているわけではありません。ただ、好きか嫌いかと問われれば日本的なものは大好きですね。学生時代の終わりに、初めての海外旅行でニューヨークに行った時でした。ショーウィンドウに映った自分の姿を見て「オレは東洋の猿だなあ」と。子供の頃からずっとアメリカナイズされた日本で育ってきたので気付かなかっただけで、そのときに自分は東洋人だということを痛感しました。旅行中、メトロポリタン美術館へ行ったんですが、そこで観た古い日本の美術にとっても心を動かされました。繊細で大胆で。まるでエスニックなものに触れるような感覚で、日本を再認識したかのような驚きでした。それまでのアメリカ的思考のなかで競争するだけの世界は「違うんじゃないか?」と感じました。でも僕の場合は、日本的というよりはオリエンタリズムかもしれません。日本美術のルーツをたどればイスラムまで行き着きますから。もともと僕は大本を



「おおきくなあれ」  
新世書房

Works by Taniguchi Hiroki



江國香織  
「泣く大人」「泣かない子供」  
角川文庫

好きになる質なんです。たとえば琳派といえば光琳ですが、光琳が憧れていたという宗達が気になるし、人の向こうに神がみえれば宗教や精神世界のことを気にするといった感じですか。では大本に迫る自分の表現は何か、とよく考えたものです。タイポグラフィや写真も大好きで、デザイナーとしてそういったものを扱った仕事もするんですが、そういう仕事をすると「谷口らしくない」って周りが言うんですよ。で、「谷口らしさってなんだろう」と考えた答えが、あたり前のようですが絵でした。絵が描けるということを大事にして、絵を武器に、絵の思考でデザインをするというように、より自分らしい場所からデザインを攻めたいと考えるようになりました。

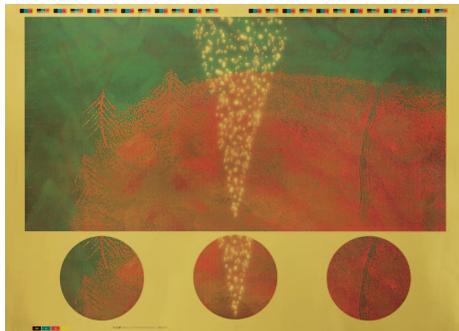
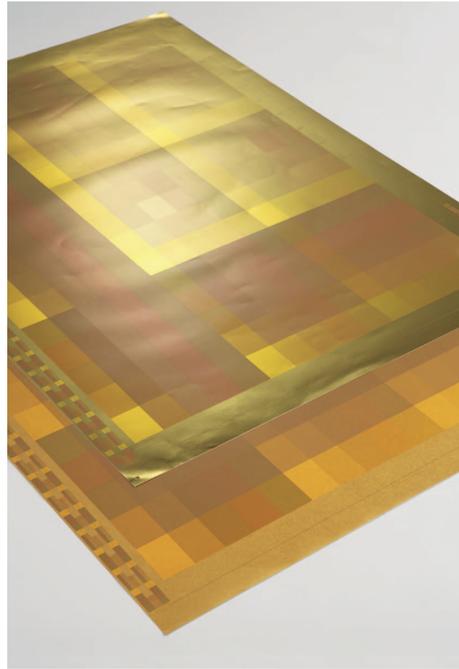
——グラフィックデザインを教える先生としての立場で、最後に、若い方たちに何かメッセージを

学生たちを見ていると、最近は枠のなかだけで生きている人が多いように感じます。課題にしても、今の流れはこんな感じだという定石のなかで仕上げてくる。世の中にあるデザインを疑わず、大胆な冒険をしない。社会に出る前に、もっともっとクリエイティブな実験をくり返しやって、世の中をよりよく変革していける力を学生時代に蓄えてほしい。一生クリエイターとして走り続けていくわけだし……。自分の人生なのだから、就職や親のことばかりにとらわれず、もっとメチャクチャに暴れて欲しいな。

## ■ ■ ■ スタッフより

「金色の紙に金色のインキで」という構想の実現に向け、我々の最重要課題は金色系特色の微妙な色の差異を把握することでした。まずは想定される金色の紙で金色系のインキによる掛け合わせのチャートを作成。紙は金属光沢の強いものから弱いものまで数種類。金色のインキは不透明なので、2色の掛け合わせにすると上に重なる版によって、同じパーセントの掛け合わせでも色の見え方が違ってくる。この実験のおかげで、金色の紙に金色のインキで印刷しても色によっては濁って金色に見えなかったり、紙によってはイエローのインキで印刷した方が金色のインキよりも金色らしく見えたり、ある程度の指針を確認することができました。谷口氏の作品では、紙地の金色がそのまま現れる部分、特色の金色による表現など、オフセット印刷による様々な金色の表現が盛り込まれています。

## オフセット印刷による金色の表現



### 1 金紙に印刷した金色の発色を確認する

数種類の金紙に金色とイエローのインキで印刷したカラーチャート。0%、25%、50%、100%の掛け合わせになっている。

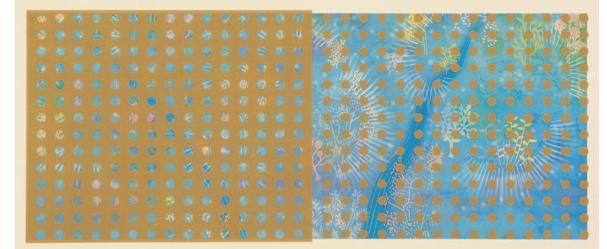


### 2 金紙にビジュアルを印刷して発色を確かめる

谷口氏のビジュアルをプロセス4色でそのまま金紙に印刷したテスト刷り。通常この種の紙に印刷する場合はオベークホワイトで下引きをするが、金紙の影響がどのくらい出るのかを確認するためにあえて下引きをせずに印刷した。

### 3 ビジュアルの上に金色を重ねる

オベークホワイトで下引きをして印刷したビジュアルの上から、金色ベタのパターンを印刷。ベタで印刷した際に、下のビジュアルがどれくらい透けて見えるかを検証した。



### 4 仕上がり

随所に金色が配置されたポスターが完成。紙の金色をそのまま生かした金色や特色での金色、金紙にイエローのインキで印刷した金色など多彩な金色の表現が随所に見られる。





a



b

a. 用紙：ハイピカ E2F / ゴールド 四六判 120Kg 版の構成：プロセス 4 色→特色（中金）  
 b. 用紙：オフメタル / 金 四六判 130Kg 版の構成：プロセス 4 色→特色（中金）→特色（青金）  
 ※展示作品は仕様が異なる場合があります